

第9回コモンズフォーラム 基調講演

フォーラムの全体テーマ「森の癒しと雑木林保育のこれからを考える」

1. 開催期日

令和4年10月8日(土曜日) 午後2時から4時半まで

2. 開催場所

苫小牧市市民活動センター 2階 研修室C

(苫小牧市若草町3丁目3-8 電話 0144-32-7111)

3. 講師

講演「癒しの森づくりは何をつくってきたのか」

さいとう はる お 齋藤 暖生 氏 東京大学大学院農学生命科学研究科附属富士癒しの森研究所

長

《講師プロフィール》

1978年岩手県生まれ。京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了。現在、東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林講師(富士癒しの森研究所所長。専門: 森林政策学、植物・菌類民俗。『コモンズと地方自治』(共著、日本林業調査会、2011年)『森林と文化』(共編著、共立出版、2019年)『森林の歴史と未来』(共著、朝倉書店、2019年)『東大式癒しの森のつくり方』(共著、築地書館、2020年)『森の経済学』(共著、日本評論社、2022年)ほか

講演内容

■自己紹介

まず自己紹介をいたします。齋藤暖生です。冬に生まれたのですが、「はるお」と読みます。僕の専門は森林ですが、森林の学問というのは結構広くて、僕はその中でも社会科学人文社会学、文系人間です。堅苦しい言葉で言えば森林政策学というような分野に収まるかなと思うんですが、もっと広く「森林と人間の関わり」を一般に調べてきましたし、特に僕が興味を持っているのは植物・菌類、キノコですね、それで植物・菌類民俗などと言っています。場合によっては、山を巡っての人と人との関係、入会(いりあい)とかですね、さきほど草苅さんの紹介にもありましたが、コモンズ、こういったものも専門にしています。これはその場その場で使い分けていました。

僕のずっと中心的なテーマは、山菜取りやキノコ採りをすること、これが博士論文のテーマでした。それもお金にならないもの、何で人はそんなお金にならないようなことをやるんだろうか、み

たいな感じのテーマです。1:47 自然の恵みの在り方、人が関わることによって恵みが得られるというようなことも含めて、お金にならない、人の営みというのを博士論文で書いてきたということですね。最近のテーマは市民と文化というようなことになるのかなあ、という風に思います。

■ 東京大学演習林のひとつ富士癒しの森研究所について

で、今日話をするのは東京大学演習林のひとつであります富士癒しの森研究所での話です。僕自身は大学は京都だったんですけど、就職して2008年からこちらの方にいます。どんなところかという、こんな風に富士山があってこれは富士五湖の一つ、山中湖ですね。湖と富士山の間にある、ちょっと見えにくいですが杣をしたところの森林、これが東京大学の演習林です。ここだと北大の苫小牧の演習林(研究林)があります。雲泥の差です。ここは40ヘクタールです。苫小牧研究林はたしか3000ヘクタールほどあったのではないのでしょうか。(草苅:「2700ha です」)超弱小の演習林で、40ヘクタールですね。そこを管理運営して研究活動をしているということです。

場所としては山梨県の山中湖村という小さな村に所在しています。この村は富士五湖のほとりにあるということで、100年ぐらい、リゾート地として開発されてきた歴史があります。有名なところだと軽井沢がありますけれども、これの2番手3番手程度の位置づけかなと思いますが100年ぐらい保養地として営まれてきた土地柄だということですね。

それから見ていただくとわかりますように、これは苫小牧とかなり近いと思うんですが、森林があるのに平地から緩斜面にとどまっているということで、これまで森に親しんだことのない人でも森の入口として機能するだろうと、というようなことで東大の演習林は国内に7か所あるんですが、例えば富良野にもありますけれども、あそこは天然林の木材を生産するというような特徴をもっておりまして、演習林ごとに特色を持っています。ここの演習林は森林の保養健康機能という、いわゆるレクリエーションのための森、森林教育のための森というような、そのための森づくりとはどうあるべきか、みたいなことを研究するのがここの特長です。5:18

もともと富士演習林と呼んでいたんですけども、今から11年前(2011年)に、震災の年だったんですけども「富士癒しの森研究所」に名前を代えています。今日お話しするのは2011年に名前を代えてから以降の話かなと思います。ですから、苫東環境コモンズさんの方がずっと歴史が長いので、あ、こんなものかとお聞きいただければ幸いです。

5:46

■ 癒しの森プロジェクトの背景

源があるのに活かさないということは、それだけ損をしているということもできるわけです。一方、われわれ人間は必ずなにか資源の恵みに頼らないといけない訳ですね。消費しているのに、すぐそこに使っていないということがどういうことかという、遠くから運んだものを使っている、ということなんです。玉つきのようなものです。身の回りにある、近くのものを使わないで遠くのものを使うというのは、地球規模の浪費に加担しているという問題があります。

それからなかなか気づきにくいところなんです、自然というのは恵みだけでなく災いという側面もあります。普段から見慣れていたり観察眼がないと、災いの前兆がわからなかったり、災いが起きたときの対応がわからない、ということです。あるいは何か起きたときにどうやって回復したらよいか、というようなことができなくなる。ということで、根本的に森と人の関係が離れていくという、これが問題だということです。

この図を紹介しませんでしたね。これはなにかというと、国立青少年教育機関、青年の家などを所掌する機関が行った調査ですが、10年間の変化をみたものです。棒の長さは何を表わしているかというと、山登りをしたことがない子供たちの割合。10年間で増えています。これはなかなか衝撃的なんですけれども、虫取りをしたことのない子供たち、1998年だと20%くらいだったのが、2009年だと4割の子供が虫取りをしたことがない、と答えているんですね。13:01

まあこんな感じで、これは日本の例ですけれども、これは海外でも言われていて、そもそも人と森が離れているのが問題になっているんだ、ということです。(この辺は省いて)

■ 研究所が課題にしたこと

さらに森林管理を巡って、研究所の課題なんですけれども、人の無関心ということですが、手入れが必要だと言われたりもするけれども、非常にコストがかかる。このコストをだれが負担するのか、という問題が解決されていないということなんです。実はこれは古いものを持ってきました。森林林業白書、林野庁が出している林業白書なんです、あえて古いもの、平成14年のものを持ってきました。これ以降、これに替わるものを出していないんです。多分、やばいから出してないんだと思います。14:03

これは林業の収益性を示したものなんですけれども、平成14年度を最後にこのタイプの図は出てこなくなりました。何かというと、これAが林業粗収入ですね。ここが林業収入-造林経費、いわゆるコストの部分ですね。この差が利潤ですね。この年にゼロになった。それ以降は恐らくマイナスなんだけど、林野庁はこれを出すのはやばいということで、この図はおさらばになったのじゃないかなあと思うんですね。で、管理は必要ですよ、と。土砂流出抑制機能とか生物多様性とか機能が下がったり、もちろん景観も穂研究機能も下がるよ、だから管理が必要なんですよ、

と言われているんだけど、この管理コストをだれが担うのかがわからない。誰も答えを出せないという状態、これが研究所の課題としてあった、ということです。

それからもう一つの課題が地域＝山中湖村における課題です。これは歴史を踏まえて考えると、そもそも地域における人と自然はかなり密着して存在していたということで、これは富士山、これは富嶽三十六景ですけども、ぱっとみて今と違うのではないかと、木が少ないんです。描かれている山はほぼ草山です。今、富士山の方を旅してもらうとほとんど森林ですけども、江戸時代はむしろほとんどが草山だった。これは明治45年頃に山中湖村で撮られた写真です。富士山がきれいにみられていますが、確認はとっていませんが、おそらく今は富士山が見えません。なぜなら、森林で覆われているから。眺望が効かないんですね。昔は馬を連れているのがヒントなんですけれども、やっぱり草地が多かったということです。馬を飼うためにかなり草を刈ってこなければいけないということがあり、森林というものがない、森林というものが少なかった。

■村のリゾート開発始まる

こういうような場所にあって、密接に山と人が関わりあった暮らしをしていたんですけども、一方、その間に、外資＝外からの資本が入ってきて 17:23 急激なリゾート開発、主に別荘ですね。保養地としての性格を高めていくようになります。これは山中湖村の村況なんですけれども、この黒く塗ってあるのが別荘ですね。こんな風に村内が別荘地の保養地として発展していくようになる。そうすると、昔の村の人たちは貧しい生活をスパッと諦めて、なるべくお金が入るような仕事の方に仕事をガラッと代えていくわけです。本当に劇的な変化があります。これを国勢調査結果で見ると、第一次産業と第三次産業、こんな風な大転換をしていくんですね。1950年、高度成長期にとにかく山に使われていたものはみんな放置、逆にみんな楽にお金をもらえるサラリーマン的な仕事、あるいはサービス業的な仕事に大転換したわけです。18:40

そうしたことが起こると、森林の方はもう全く関係ありませんよと、こんな倒木があっても意に介さない。というような状況が生まれるに至ったわけですね。今、村では森と人のミスマッチが起きている。村の人はこの荒れた森を権利保有者として森を持っているわけですがそれにはまったく関心がないわけです。自分らは観光産業とかに携わっていて、最近なんか、山中湖を通過点にする人が多いんだよねえ、というような話をしていたりします。

一方、別荘地に住みついて来る人がいます。移住者とかそういう人は自然が好きで、森との触れ合いを求めてきたり、あるいは薪ストーブを使ってみたいよ、というようなことで来るわけです。憧れてきたんだけど、森林の権利がない。外から来た人なので薪を取れる場所がなくて困っているんだよ、という。ここにあるじゃん、と思うのだけれどもそこは(森と人が)つながっていないから、なんかもったいないなあ、というところなんです。

なので癒しの森のようなコンセプトのプロジェクトをすることにより、例えばこの人たちが薪を採りに来て森がきれいになれば観光客やリピーターが増えてくれる、この人たち(古くからいる住民)もハッピーでしょうと、たとえばそんな風な形をつくれれば森の整備も回るし、それと地域の課題も解決できるんじゃないかなあ、ということで、研究所の課題でもありますし、さきほどお見せしたような癒しの森プロジェクトを考えてみたということです。20:56

■癒しの森プロジェクトが目指すこと

癒しの森プロジェクトが目指すことについてですが、森と人を癒しというキーワードでまずはつないでみようということです。薪採りたいから行きます、とかなんでもいいんですよ、山菜とか木の実を拾いたいから行きます、とかなにか楽しいものがあるから森に入るという入り方です。金になるから入る、ではなくて楽しいことがあるから、癒して森と人をつなぐ。それからなるべくできるだけ多くの癒しを引き出す。経済的な要素も大事だけれども色々な楽しい、うれしいというような感情を森から引き出せるものがある、と。歩いて楽しいかもしれないし、炎を見て楽しいかもしれないし、あるいは山仕事自体が楽しいよ、というような目で森と関わることによってこういったハッピーが増すのではないかと、というのがわたしたちが考えた癒しの森のコンセプトだということです。

ここまでは絵空事なので、ここからが難しくなっていきます。では、具体的にどんな森づくりをするの、ということです。ある意味、わたしたちはそこで匙を投げました。難しいんです。癒しの森というのはどんなふうに手をだしていけばいいのか、といえば、きっとこれは答えを出せません。それはなぜかという、この癒しというのはかなり主観的なもので、何が好ましいかということは、千差万別で、今日もお昼、草苺さんと食事をしているときお話が出たのですけれども、お年寄りの方なんかからすると、森と言えば危険というようなことが頭にあり、安全な森、例えば見通しがいいとか、躓かないような場所、こけない場所をつくらなければいけないし、また、対極の話で子供たちはどうかというと、子供たちは逆に冒険心を刺激してくれるような 23:43 森の方が良かったりするわけですね。例えば、藪がないとだめですね。秘密基地が作れるようでない、面白くない、退屈する。両極端なことをいうと、そんな風に違うわけですね。なので、それから想定される活動内容によっても、異なるということですね。24:05

これは先行研究である程度言われていることで、これは森の木の生える密度によって活動が違うよ、というようなことが示されています。密に樹木が生えているようなところだと、散策するには適した環境ですよ、というようなことが言われていて、それから透かしてあげたような、ヘクターあたり300本から600本、そもそもこの600本というのは、今の森林の状況からするとかなりスカスカかなあと思うんですけども、透かしてあげると休憩に良い、ということですね。さらに

ヘクターあたり300本以下にすると、これは公園に近いんじゃないかなと思うんですね。そうすると運動したり、フリスビーを投げて遊ぶとか、そういう運動に適したところになるよ、ということが一応は言われています。25:18

でも、本当に活動によって違うので、では癒しの森としては何がいいのかということ、決めきれないんですね。なので、匙を投げました。とりあえずの管理方針というのは一応作りました。それは何かというと多くの人にとって安全で、かつ、それなりに快適に過ごせる、というような大雑把な方針を定めました。それに従って考えると、危険となる枝や樹木の除去、ということです。それから、子供たちがヤブだっていうくらいのものであったらいいとお話をしたのですが、でも我々の演習林に関しては、なかば山猿のような人が来るわけではなくて、本当に初めて森に触れるような初心者のような人が来るので、やはり目をつく、などというのが怖いんですね。だからなるべく低木類の除去とか、安全という考え方から管理指針としては立てているということです。26:40

これはあくまでも例ですが、わざとやっている所です。大学なので、よいものと悪いものを見せなくてはいけないので、これは道の右と左、いずれもカラマツの人工林ですけれども、森林景観をあえて変えているということです。景観Aと景観Bをつくってどちらがすきですか、聞いたりすると少なからずの日本人は景観を選びます。ではなぜこういう景観の違いが生れてくるかというと、管理の仕方が違うからです。こちらは年1回下刈りをすることによって、見通しが良い、日本人が好むような景観になっている。こちらは何もしない、ヤブがたくさん生えてくるという状況です。

多くの日本人が好む森であり、癒しの森づくりがめざすが安全で快適な森ということ、普通は管理コストということになってきます。木材を売って林業を営んで木材を売った収入で人を雇ってこの仕事しますって、成り立たないですね。賄えるはずがない。ではどうするか、といった時に、山仕事、それも楽しみとして山仕事に入ることによって、成り立つのではないか、ということですね。森林管理といってしまうと、そこはもう管理費用ということになってしましますが、費用としてではなく楽しみとしての山仕事ができる、ということを考えてみようということですね。安全に楽しみながら山仕事が行われるということで、結果的に安全で快適な森が出来上がる、というようなことが大事なのではないか。というようなことを考えてわれわれは研究をしてきたと言うわけです。29:02

この時に考えたのは、生産性や効率重視、林業の場合はこれをやらなければならない。そうでないと赤字になってしまう。しかしそうではなくて、我々が考える山仕事で大事なのは、仕事の楽しみが大事だ、という考え方をするわけです。ちょっとややこしい話かも知れませんが、ぼくは人類学とか民俗学とか、参考にさせてもらうことがあるんですけども、そちらでは技術と技能という言葉を使い分けているんです。言ってしまうと、技術というのは例えば機械力だったりす

る。技能って何かというと、スキル、テクニック、コツ、みたいなものですね。29:58 技術が高まれば高まるほど、技能、コツは要らなくなる。誰でも上手い下手なく同じような仕事ができるようになる。技術が低いような道具、単純な道具を使えば使うほど技能、スキルが、コツの方が求められるようになるということです。

例えばどういうことかということ、木を伐るといものを、手ノコ、チェンソー、ハーベスタ、という林業機械を考えたときに、手ノコは本当にコツが必要ですね。上手い下手がすごく出る。学生なんかにはやらずと全然ダメ。グニユグニユやってよくのこぎりの歯を曲げてしまう。チェンソーになるとその辺の差はだいぶなくなってくるんですが、どの方向に倒すのかというのは、まさに腕が出てくる。多分実感を持っていらっやると思うんです。ハーベスタになると、もちろん操作の腕というのはあるんですが、基本的に機械力で倒したい方向に倒せます。というようなことになります。31:15

薪割りもそうですね。やはりコツが必要です。それに木の目も見なければいけないし、節がどこにあるのか、そういうコツが求められます。逆に薪割り機なんかだと、節があってもバリバリと行ける。技術がより高度になればなるほど、スキルは必要なくなる。31:45 でも立ち止まって考えてみると、仕事の面白さって何だということですね。実は単純な道具の方が、つまり技術が低いものの方が、スキルが要求されるから、それで楽しい。頭を使う。だから、癒しの森づくりにおける林業技術、森林技術というのは、使ってはだめという言うわけではないけれども、結構馬鹿にしちゃいけないよ、というわけです。32:32

ハーベスタなどで木材を引きずり出すのと、これあるんですよね、ロープウインチ（ポータブル・ウインチ）、個人でお持ちだということですが、こちらの方が手数がかかるんですよ。でも仕事の面白さから言うと、こちらに軍配があがったりすることもあると思います。

家の建築に関しても今のメインは、コンピューターでプレカットという工程で工場で組んでしまう。現場ではプラモデルのように組み立てるだけなんですけれども、こういうのもありますが、こちらのようにローテクで丸太のまま使う。あとで紹介しますが、こういうモノづくりが面白かったりする。あと、市民レベルで手が出せる技術という大事さ、ということです。33:35

ということで、我々は山仕事を楽しむための道具というものをいろいろ導入してきたのだと思います。これがそのロープ・ウインチですね。これの何が楽しいかというと、搬出作業ですね、間伐の際にも使うので搬出がすごく面白い。どういうルートを使ったらうまく出せるのか、パズルゲームのようなところがあって非常に面白い。

それから、木材トング。普通はワイヤをかけて引き出したりするんですが、こういう風にみんなで

協力し合いながら運ぶときには、こういう木材トングが良かったり、それからこういう簡易製材機。これ3万円ぐらいするのですが、山の中でちょっと大きな材が出たときに、これを持っていけば、板に挽いて人力でも運べるんですね。で、すぐに結果が見れる、ぱたんとやってこんな木目が出た～、というようなことで楽しめる。あとは癒しの森でよくやっているのは、枝の掃除です。柴とか枝がその辺に散乱して見苦しかったりするんですけども、それをどうするかということで、演習林ではもともとはチップパーという機械を買って使って砕いていた。それも悪くはないんですが、どうすれば処理できるかということで、燃やす、無煙炭化というのですが、焚火を燃やししながら落ち枝をコンパクトに片づけるということをしています。

■薪づくり、薪利用

それから山仕事で一番大事なのは、苫東コモンズさんでも一緒だと思うんですが、薪を使うというのが、大事なのかなと。というのは、安全な薪づくりというのを考えたときに、真っ先に狙うべきは危険木なんです。枯れかかった木、あるいは枯れてしまった木、そういったものなら薪には絶対使えるわけです。癒しの薪づくりでも薪としてちゃんと使うというのがキモになる、原動力になるだろう、ということです。こういった薪棚づくりも自分たちでとって来たもので楽しめる。で、この辺のことは説明の必要がないと思います。薪を使うことは癒しになりますし、薪割りは絶対人気で学生はやめてくれないです。われわれの演習林ではなかったんですが、使う薪が原木がなくなって近くのおじいさんのところまで行って「薪、割らしてください」と学生が行ったこともあります。当然ながら薪を使ってピザを焼いたりも癒しのメニューになったりします。

あとは薪以外でも柴刈り。灌木を刈り払い機でやってしまえばいいんですが、手作業も十分楽しめるということです。学生が結構、黙々とやってくれたり、刈り取った柴を使ってこういう垣根をつくったり編み垣をつくったりします。これはイギリスでよくやっているように美しく見せています。動物をよけるという意味もあります。

これはまたあとで詳しくお見せしますが、森の中で音楽会を開こう、という時に地域住民がここにみんなが座れるように、とにかく落ちた枝を拾おうとして快適空間が出来たりします。これはただゴミになるのではなくて焚火に使う、焚火として楽しむということが癒しの薪づくりに繋がっていくということです。それから我々のところで特徴的なのは、落葉焚きというのをやっています。これは秋というより冬ですね、イベントとして森林管理をやる。これをやることによって、熊手で落ち葉を掻くんです。そうすると実生になりそうな、藪になりそうな植物というのは掻きとられるわけですね。燃やすのが面白いからみんな夢中になって掻きとるわけです。そうすると刃物を使わなくても見通しのいい快適な森林景観というのは維持されるということです。39:17

こうやって火を使いローストチキンを作ったり、なかなかオススメなんですけど、カボチャの丸焼

きですね。カボチャを上から3分の1ぐらいで切って、中身をくりぬいて、そこにチーズとかベーコンとかキノコとか詰め込んでグルグル巻きにして火の中に埋めておいて一時間半くらいかかるんですが、これはオススメです。

■ 森がきれいになる意味とその原動力

で、こういうことをすると結果的に森がきれいになる。そうするといちいちコストをかけなくても、森づくりができるということになります。

技術論としてはそれでいい。40:06 でも、この癒しの森を演習林40ヘクタールの中で実現して何の意味があるの、ということです。もちろん展示するという意味はあります。こういう仕事をしていくとこんな林の景観になりますよ、こんな林ができてきました、というのを展示することは意味があるんですけども、一番意味があるのは、地域、保養地でしょうか。保養地の森づくり、保養地が実現できなければいけないでしょう。ということを考えなければいけない。実際、それが研究課題になっているのですけれども、われわれの演習林はあくまでも土台、試行錯誤するテストベッドです。試験台です。それを見てもらって地域社会でちゃんとそれを回すようにしなければならぬ。そういう仕組みづくりを目指すのがわれわれの狙ったところだとことです。41:08

それでいくつかあるんですが、まずこれです。先ほど言ったように、薪づくりというのが多分原動力になる、ということを考えているのですが、本当に原動力になるのか、ということの研究として考えてみたりしました。これは2014年にやった研究ですが、ちょっと紹介してみたいと思います。こんな風に地元住民を調査員として雇って、村内のすべての道を歩いてもらいました。そして煙突が見えたらそれをチェックする。薪置き場が見えたらチェックする。こんな風に地図上に煙突のある家、薪置き場のマッピングをしたということです。

そういった家屋で薪棚あり、実は少量しかないというようなことも調べたりしました。結果として数を把握するというのが、ひとつの主目的だったんですね。赤と黄色でマッピングしていたんですが、これによってわかってきたのは、村内で薪ストーブ、薪を使っているというのは恐らく350軒という実態を実数として把握することができました。さらに煙突調査した時に、煙突のある家にアンケートを投げ込んでいたんです。アンケートを投げ込んで、回収したら色々なことが見えてきた。アンケートの回答を見ると、自分で薪を作るという人が実は大半だった。ということがわかりました。43:12

製品を購入する人というのは多いんですが、割合からすると4割弱、多くの人は何らかのかたちで自分で薪づくりに関わっていた。これは癒しの森づくりのコンセプトとしていけるかもなあ、という感触を得たところです。それからどんな道具を持っていますかという質問には、8割の人が

チェンソーを持っていて、これもびっくりしました。薪を使う人の8割もチェンソーを持っている。益々これは、癒しの森づくりにとっては都合がいいということがわかってきました。それから斧を持っている人もいますね。なので、愉しみとしての山仕事をやっている人というのはかなりいるんじゃないかなあ、ということが見えてきました。

■薪に関する社会実験

ただ一方で課題になってくるだろうなあと思ったのが、どんな薪を使いたいですかという質問をしてみたら、広葉樹のみを使いたい、あるいは針葉樹でもいいが広葉樹が好ましいと答えた人が3分の2になった。樹種は選ばないと言った人は3分の1程度。44:35 これがどう都合が悪いかというと、実際のもの量ですね、統計データによると広葉樹よりも針葉樹の方が、3倍くらい多いんですよ、村内では。でも針葉樹の方がたくさんあって、間伐するんだったら針葉樹の薪をたくさん使ってほしい。でも、薪ストーブ使っている人はみんな広葉樹が欲しい、というミスマッチをどうするかというところがここでは課題だということですね。

で、さらに研究したんですが、このアンケートを応えてくれた人たちに、今度演習林で木を伐るので買いに来ませんかというということで、社会実験として競りをやったんです。試験のために伐った木を1㎡ずつ並べて競りをするという実験をしました。その結果はざっくり言うと、㎡あたりこの原木が3000円で売れたんですね。4541でも針葉樹と広葉樹に関する意見が現れていて、針葉樹は㎡あたり1700円あたり、広葉樹だと6000円を超える値段がついた。これだけ需要の差があったのだとわかりました。…(このあたりで競りの実況……)

ゲーム感覚で参加者も楽しめて、値段も上げて、でもこれはれっきとした研究のつもりでやっていて、同じようにこの桧の方はどうですか、などと、値を釣り上げて売ってみたということです。グラフにしてみた面白かったのが、我々は適当に積んだつもりなのですが、桧の中の直径の平均値が高い、つまり建築業風に言えば太い材が安かった、逆に直径10cmとかそれ以上辺りは高い値段がついた。薪で欲しいという人は扱いやすい大きさ、こんな20cmや30cmもあるものは、家に持って帰っても困るよ、と思うんですね。だから欲しくない、値段が上がらなかった。森林所有者さんに伐らせてくださいと市民が行ったときには、細いのでいいのですがといえば、森林所有者さんはいよいよ、それは支障にならないから、というようなことになるだろうということが見えてきた。

それから第1回をやって見えてきたのは、2mの材で出品したので、持って帰るのに自分のチェンソーを持ってきていいですよ、と言ったら8割の人が持っているわけで、やらせたらやばいなこれ、となりました。みんな、切れない。で、目立ってますか、と聞くと「えっ、目立って?」と聞かれるわけです。「そんなの必要なんですか?」というわけで、これはヤバイということになりました。第

2回、3回の際は、地元の目立てをできる人を呼んでチェーンソー目立てサービス500円、やってみたりしました。49:15 そういうことをすることによって、移住してきた人と地元の人とコミュニケーションを計ってみたりというようなことをやってきました。

■薪に関する状況変化

そうこうしているうちに、薪に関しては状況がガラッと変わってきました。針葉樹を使う文化を育てなければいけないあと、思っていたら、事情が変わって、何かというと2020年、今から2年前から、・・・ところでナラ枯れって知っていますか？北海道ではまだ見つかっていないんですが、本州ではナラ枯れが猛威を振るって、・・・これ山中湖村の被害地ですね、ほぼ真っ赤です。これは去年のデータですけども3600本、村内で確認されました。とにかくナラの木がどんどん枯れていくというような事態が続いています。とにかく今、ナラの木が多いのです。そして伐らなければいけない。特に道路沿いとかは、朽ちて倒れる前に伐らなければならない。

そのナラをどうするか、ということで去年やったのが若者グループを引き込んでみて「薪割りしてみないか」とやってみたら、これがはまってくれたんです。うれしかったのが「オレ、薪割りの斧、買ったんですよ」とか、そんな人が2,3人出てきて、若者が薪好きになっていく。こんな風に、干す作業までやってくれて、そこで何をしたかということ、去年の紅葉祭りで、木を使ったお店というのを出したんです。エクステリアで使いつつ、焚火バーみたいなものをつくりマシュマロを焼いたり、というようなことをやり始めています。51:21 今年もやる予定だそうです。こんな風に、若者が村のイベントに薪を活用するという動きが出始めたということです。

■村との連携

それから村との連携も進めていまして、先ほど、写真を出しましたけど、タブレットを使ってナラ枯れがどこにあるのかということとを共同で調査しました。それで、村の被害を把握する。でも、あとでわかったことですが、被害の把握というよりも、倒して使える木がどこにあるかという資源把握ということなんです。それをベースに3600本も使える木がある、という。ではどうすればいいのかということになると、貯木場が必要だろうということで、これは今年度中に設置される見込みです。52:25

それから村行政と取り組んでやったのが、チェーンソー特別教育。林業技術者が必ず受けなければならないものなんです、あれを村と一緒に考えてやった、ということです。何のためにやるかということ、特に村の若者、さきほど薪割りに来ていたような若者を、3日間、ここにぶち込んで即戦力にする。村が経費を出してくれます。演習林などを使ってみっちり特別教育を行う。村のナラ枯れ材を彼らに伐ってもらう。なんだったら薪生産をする、というような方向に今、準備を進め

ています。

ただ、この資源把握の段階で、量的には薪だけではやりきれないよね、ということがわかってきました。53:23 薪だと、どうしても単価が知れているので、より高付加価値の産品で、ということの企画も村と一緒にやる。例えば、木地師というのを知ってますか、回転するろくろを置いて削る。そういう人がわれわれのナラ枯れ材を持ちこんで何か試作を作ってもらえませんか、といったら、「あ、いいね、なんか社会的に大事な課題だからやりますよ」ということを二つ返事で言ってくれて、今、試作してもらっている所です。これにも村に絡んでもらっています。

それから薄くした板、ナラ枯れ材にはこういった虫の穴が入るんですね。54:29 おそらくこれを使った方がいいのではないかと。スポット入りの材を使ってコースターを作るとか、試作段階なんですけどこういうものを作って村の産品にして今後ふるさと納税などのお返しにもしていけたらいいよね、というような話をしています。

■ 森の文化、それは森を見る目

これで1時間近くになりました。こうやって地域社会とどう森づくり、森を使うということにつながるかということをやっているわけです。でもこれは癒しの森づくりのプロジェクトの最初からの疑問だったんですが、そもそも地域の人々が森に親しんでいるか、森に親しむ文化そのものをつくる必要があるのではないか、ということは考えていて、答えから言うと、ほとんど森に親しんでいなかったんです。では、われわれがいかに山仕事をしましょう、などといっても特に地元住民の人たちは、別荘住民や移住者の人たちはそんなに心配はいらないんですが、もともと住んでいる人たちをどう取り込んでいくのか、ということは大きな課題としてあったということです。

ということで森と親しむ文化を作るということも裏の課題として取り組んできたかなと思っています。それは何かというと、一言で言うと、森を見る目、をかえるということ。ただ有るもの、借景としてふつつあるわけです。富士山がある、富士山の手前に森がある。森がなくなると、ああ、大変だと思っただけけれども、でもその程度なんです。ただ借景としてある。それを意味のあるもの、先ほど言いましたが恵み、意味あるものとしての見方、眼差しを代えてもらうのが大事な、と思います。

先ほどちょっとお見せした丸太を積んだ四阿(あずまや)ですが、これも伐って倒されている木であってもこんな風に使えるんだよ、というような、そして薪にも使えるんだというような目を持ってもらいたかった。丸太を積むだけだったら、オレにもできるじゃん、という風に思ってもらいたかった。このためにこのような仕掛けをしています。あとは薪を作るために、スウェーデントーチとか、サウナもそうですが、地域住民が来た時に見せて、見る目を変える。若者たちが薪割りにはまっ

たと言いましたが、その前にこのサウナ体験があった。そのあと、薪割りにはまっていく。

それから木材利用なんですけど、こうやって完成材を地元住民が自ら板を切り出して、フットパスのサインを自分たちで作るのをやって、実はその辺にある木も使えるんだね、と気づいてもらう。枝で小物づくりをする。これは枝をスライスしたもの、これはアロマオイルを垂らせばアロマディフューザーとして使える、コースターとして使える、などして、この後紹介する音楽会の参加証などで使いました。あとはなんの変哲もない板も、こんな風に樹名板でつかえますよ、というものです。

こちらは苫東コモンズが先輩ですねですね。58:58 フットパスというのは楽しいんだよというのをわかってもらう。講座もやっていて、みんなで簡単に径なんて作れるんだよ、と村人と一緒に楽しみを創り出す。あとは健康づくりというのをキーワードに、森に接してもらう。

■究極はコモンズである

今準備中なのは、演習林の中に開放エリアをつくるということです。これ、去年やってみたことですがエリアを区切って一般開放エリアをつくることによって、日々の散歩、健康づくり、色々あっていいんです、犬の散歩でもいいです。とにかく地元の人に来てもらう場を作らねばと準備をしています。これは学問的にはどういうことか、ということですが、コモンズ、苫東環境コモンズさんが先輩なので申し上げることはないんですけども、コモンズとしての演習林、一般開放ということを考えていて、ポイントは何かというと、伝統的なコモンズとの違いかなあ、と思っています。

伝統的なコモンズというのは、持続可能性ということでもよく評価されてきた。それでオストロム博士がノーベル経済学賞までとったんですけども、博士が真っ先に掲げている特徴は何かというと、明確な境界、なんです。つまり排他性です。ここからここまでがオレたちの土地だ、しかもメンバーシップも限るわけです。この人はコモンズを使える人、この人は使えない人と明確に境界を作るわけです。だからその中でルールを作って知っているメンバーだけでルールを守るから持続的だった、というのがポイントです。

でもこれからの社会で必要になってくるのは、たぶん、そういうことではなくて、いかに開くのかということだと思うんです。ガチガチの排他性をやっているとおそらく今、躓いてきている。だれも入ってこれない。森っていいなあと思ってみているながら権利がないので入れません、という1:01:59 ことで、人と自然、人と森の関係はできている。じゃあ、そこをどう開くのかというのが全体的な課題なわけです。仮説的に考えているのは、段階的なメンバーシップですね。昔のコモンズというのも、所有者、管理者だけに閉じてその中でルールを作ってよそ者が来たら「入るな」として持続性を計る。

でもこれを今やってしまうと、逆に邪魔をするだけになる。あ、ここいいな、手入れしてあげるのに、という人まではじてしまう。そうではなくて、もっと緩やかにメンバーシップを想定したらいいんじゃないか。コアはそういった管理者、その裾にコアユーザー、さらにその外に一般ユーザー、一元さん、来訪者、というようなものもイメージしたメンバーシップを想定するといいいのではないかと思います。そこでは特に中間の部分の人が大事になってきて、コアユーザーが中心になってルール作りを、自分たちは週に2,3回来ますよ、とかいうような人が森のことをよくわかっている。ということで、本当の所有者とよく話し合っ、ルール作りをしてなるべく問題の出ないようなルールを作って外の人にも開く、という仕組みが創りうるんじゃないかなあ、と思うんですね。

■ コモنزの今日的意義

わたしが個人的に一番大事だと思うのは、そうすることによってリピーターが増える、開くとリピーターが増えてそういう人が何回も来る人のおかげで、何がだめなことか、などが頭に入っている。それはちょっと問題ですよ〜という行動があったら声をかけてくれる。ルールがなくてもそういうインフォーマルな表には出ない秩序というものが形成されて結果的にそれが管理になる。こういうことが大事じゃないかなと思っています。それは所有者、管理者にとってもすごくいいことなんです。われわれ演習林でも見回れないです。40ヘクタールを実は二人の技術職員で見っていますが見回り切れません。そういう意味で、良心的リピーターが増えるということは森林の管理にとってもいいことだ、ということになるので、こういうインフォーマルな秩序ができることが大事だと思っています。1:04:47

いよいよ最後の終盤になっていきますが、地域社会を見据えた癒しの森づくりは、地域住民と実践しながら答えを探していくという研究スタイル、これはアクションリサーチと言います。そのこれによって派生した結果がある。これは各年度でどういう公開講座や公開イベントをやっていたかという表ですが、各年度で3から4回のイベントを打ってでた。これ、いずれも地域住民を巻き込む仕掛けだった、アクションリサーチの仕掛けだった。2011年からやってきて2017年に、ちょっと転機があったかなと思っています。

二つの大きな出来事があった。一つは、村行政との協定手続き。もう一つが「癒しの森の会」の設立、というのがありました。今見たように基本的に地域社会、村内に種をまき続けた段階だったのですが、いくつか芽吹き、2017年ごろに苗としてそだってきたかな、と。その苗の一つが協定締結という形で生まれてきました。村行政との提携というのは、我々にとってすごく大きくて、調査研究が格段に大規模なものができるようになった、ということです。これは森活プロジェクトというのを村の福祉課、保健士さんと一緒に共同プロジェクトをやったのですけれども、750人のアンケートというやや大規模な調査をできるようになったり、先ほどお見せしたナラ枯れて

すね、この調査も道なき道を案内してくれる猟師さんを雇ってくれて調査ができるようになった。
1:07:08

それから大きなことのもう一つですが、住民組織の癒しの森の会というのが、立ち上げられたということです。2017年の4月に発足しました。現在16の方がいらっしゃいますが、その中の8人がこれまでの公開行事に出てくれた人たちです。その人が自分の友達を呼びこんで、こんな16人の組織になりました。こんな風に自分たちのオープンテラスを日曜大工で作ったり、ウッドデッキを自作したり、あとは歩く会をやってみたくとかとにかく森と親しんで森の文化と一緒に創るということをこの目的に掲げて活動しています。

ひとつ大きなことを成しえたのが、癒しの森の朝もや音楽会という、2020年の8月にやりました。この癒しの森の会がいてくれたから、というか実際に来られたのは10人ぐらいなんですけど、そのぐらいのスタッフで200名の音楽会ができた。2か月弱の企画準備期間で彼らの働きがあってできた。それも基本的に手仕事です。何をやったらいいのか、ということ全部書き出して自分たちで考えて、手仕事でその200人規模のイベントをやった。森の片付けなども、枝をスライスしたのをお金払ってくれた方にお上げしたり、手作りで実現できたということです。

そのあと2021年には夕方にやって今年また朝にできたんですけども、数分程度の動画ですのどんな様子か見てもらいましょう。

……動画上映……1:11:01

こんなコンサートを森の中でできたんです。最初の年2020年にやったんですが、コロナで音楽家たちが何もできなくなって、という相談があって、では森でやってみましょうか、ということになって、森だから、あけっぴろげだし、コロナも気にしないでいいからと、試しにやってみますと来てくれたんです。やはり発見だったのは演奏者たちが森の中で演奏するというのがえらく面白がってくれたんですね。だからサービス与える側なのに、そういう関係ではなく彼らがむしろ喜んでくれた。これも癒しの森のコンセプトに合ったのかな、だから来続けてくれているんですけどね。

これもそうなんですけど、癒しの森の会があったためにさらに刺激されたこともあって、自分たちで森の文化祭を去年初めてやりました。去年は、森の中で、先ほどの音楽会の真似といえばそうなんですけど、自分たちで音楽をやりたい、ということになってステージをやったり、建物のなかでこういう村内の芸術家などを集めて展示会をやったりしました。今年は今月末に予定しているんですけど、会員のみなさんと議論をしあって、わだかまりというか、森の中で文化祭をやるってどういうこと？建物の中と森でやるのとどう違うの？森でやるからにはどうあるべきなの？を考えていてディスカッションしてもらいました。今年は森を使わないと意味ないんじゃないか、森をど

う展示場にするかということをしてみたり、焚火語り場だったり、その辺の樹木はかなり草木染でつかえるよ、染色ワークショップはやってみよう、見て楽しむということのためにガイドツアーやろうよ、とか、チェンソー広場みたいなところを設けて、チェンソーの使い方やチェンソーを使うとこんなことができるよ、というようなことを展示したり、薪のアートの展示をしてみようとか、そんな話があがってきています。

なぜ森でやるのか、森の文化の交流拠点づくりということで企画を準備したりしています。会も成長し大分考え方が変わったという状況です。1:14:02

ここまでのところですが、癒しの森を振り返ってということで、まあ10年の取り組みからの気づきです。実は森づくり森づくりと言ってきたけれども、なんだかんだ言っても人づくりの面がおおきかったな、と思います。人づくりというのが、文化を創ることだけでも人の眼差しを変える、価値観を変えるというところが一番大きくて、そのうえで森と人の関係ができてくるし、それができてくると人と人の関係ですね、その間をとりもって紡ぐ、あるいは僕らが直接彼らとの関係を作っていくことの重要性に気が付いたかな、と思います。

特に大事だなあと思ったのが人と人のつながりです。これは学問的には社会関係資本、ソーシャルキャピタルと言います。これが10年間蓄積され続けたという風なことを我々は思っています。だからこそ、40ヘクタールにわれわれ教員は二人しかいない、それなのにそれなりのことができたというのも社会関係資本があるから、まさに資本として働いた、手持ちの資本は少ないんだけど人と人とのつながりが資本になってそれなりに大きなことをすることができた。10年たって思うのはやはりまだまだ完成ではない、完成はたぶんない、この関係性というのは常に紡がれ続けて、もちろんなくなっていくのもあるんだけど変化していくんだろうと思います。

僕の専門に近づけて言えば森林の文化なんですけれども、こうやって考えてみると、森林文化というのは人と森が接していればいいわけではなくて、人と人のつながりがあって、そこでこれはこういう見方ができるよと教えあったり、高めあったりしていくものが森林文化なのかな、と。その森林文化があって森と接する場があってその土地で森の形ができていく、それが癒しの森ということなのかな。だから、癒しの森というゴールを見据えて動くということよりは、ゴールというのはあとから見えてくる、大事なものは下地で、下地というのは人と人とのつながりなのかなあ、と思っています。

この社会関係資本ですが、実は去年、2021年からまた10年計画を立てています。そこでは中心に据えました。森林計画をするうえでおそらく社会関係資本を活用すると書き込んだのは、我々の研究所がはじめてではないかな、と思います。社会関係資本を組み込むことによって、色々な森林管理ができるというふうに計画しているわけですね。これが癒しの森プロジェクトの

概念図ですが、人と人と地域がつながることによって、より充実するというようなことを計画しているのが今の10年だということです。

もしよければ最近の記事などどうぞ、ということでご紹介しておきます。大分時間を超過しましたが、わたしが用意してきたお話は以上です。1:18:13

司会:

ありがとうございました。いい意味でツッコミどころの多い話を伺いました。ツッコミドコロという
と最近岸田首相の話しに使われますが、今日のお話しはいい意味でポイントが沢山あったと思います。

時間があと1時間ほどあるので、おトイレなど行かれる方は行っていただいて、このままダラダラ
と質疑、意見交換を続けていきたいと思います。

*フロアからの質問や意見は、ボイスレコーダーで音声を拾いにくく、再生文字化できませんで
した。辛うじてキーワードのみ拾いましたが、講師の返信内容から質問骨子をご推測いただければ幸いです。(草薙)

●森の開放と事故発生時の訴訟問題と対応

フロア:(川合)

大変興味深いお話、ありがとうございました。森の山仕事をされる人たちが、…一般の方が森
に関わっていくとか、そのなかで課題になることとしては…(コモンズなども)…安全管理、
怪我などがある…。これは管理者の責任が問われる…。その辺はどのように考えておられ
るのでしょうか?

齋藤:

そうですね。まさにそこが問題だと考えていて、人と森の関係が切れて一番問題なのは、災いで
それを感知する能力がすごく下がっていることなんです。山仕事をする人に関しては、段階を踏
んで学んでもらう、さきほどの特別講習、本当はやるべきだったことはレベルごとに進級する仕
組み、教育プログラムというのを本当は作りたかったんだけど、状況に迫られて一気に即戦
力を作るという方向にってしまったわけですが、本当はレベル分けのプログラムを作るという
のがこの計画の中に入っていたんです。ただナラ枯れということもあって、そうはいってられな
いという実情にありました。作業に関しては段階によって、リスクマネジメントがやれるようにな

っていく。大事なものは教えあい、みんなで横のつながりで高めあう、というのが大事だと思えます。ただ、リスクの内容というのは地域によって全然違うと思うんです。だからエライ先生が来て教えると言うのじゃなくて普段の作業の中で気が付いたことを教えあうというのが、一番のリスクマネジメントになる。だからそういう仕組みは作りたいなというところなんです。

それから作業ではない人、森に遊びに来る人に関しても、まだリスクが見えていない。1:21:39それを前提に一般開放エリアをここ、というのは設定しています。本当の入口はリスクを排除します。知らない人でも大丈夫なような、その人たちがワンステップ行く仕組みというのは作っていかねばならないですね。段階的に育つ仕組みというのは作らなければいけないなと思っています。

フロア(川合):

…万全を尽くしていくと思うのですが、どうしてもその中で事故が起きてしまう…そういった時に責任問題というのが…責任問題は…そのあたりはどうなんでしょう。

齋藤:

そうですね。チェンソーの特別教育については労災がおります。村が発注する仕事で、発注が受けられるように法定の教育を受けました、と。この法定の教育を受けていると、労災になりますのでそこはそこで管理される。

一方、市民ボランティア的な活動の部分はカバーされない訳ですよ。それは先輩の取り組みというのか、NPO日本森づくりフォーラムなどがやっているのは山仕事保険みたいな、市民ボランティアやるにはこれに入ってもらう、などというのはやっています。

ホームページで確かめてみますが、ボラ作業日が決まったら、誰だれだれと書いて森づくりフォーラムに申し込むんです。

司会(草苺):

団体保険ですね。前日までに申し込んで、終わったら報告するという仕組みです。苫東コモンズも当初だいぶやりました。安いけれども、事務局がそれをファックスでやるのです。勘弁してほしいと言いたいくらいに手間がかかりました。施設賠償責任保険だとか、ちゃんと見ているんですけど、ちょっと使い勝手悪かった。

それで私たちNPOはどうしたかという、NPOに加入するときに確認書を書いてもらって、アゴ・アシ・怪我は自分持ちという誓約をしてもらったうえで、各人がボランティアでチェンソーも使える傷害保険に入ってもらうことにしました。しかし、富永さんによれば、最終的に団体の責任は免れないようですね。

フロア(富永):

…自分の怪我は自分持ちというのはいいんですが、(個人の傷害保険では当然ながら)施設

の賠償責任まではカバーされない。絶対怪我をさせないというような仕組みを創らないといけないのかなあ、と。……

司会(草苺):

…もう一つ、噂ですけども、万が一不特定多数の人を入れた場合にけがをされると訴訟では負ける、と。(つまり確認書では効力が危うい、と)

齋藤:

岐阜であった事故なんですけど、岐阜市が主催していて子供たちに森林の大切さをわかってもらおうということで、親子で来てもらって、落ち枝があって6歳の子が脳挫傷になったんですね。これは主催者の岐阜市が訴えられて負けました。

フロア(川合):

それはつらいですよええ。

齋藤:

でもこれはそうなっちゃった。判例がそうなので逆の判例が出ない限りきつい。あときついのは奥入瀬の事故ですね。あの判例があるから状況としてはマイナスですね。本当はちょっと危険な目にあうから覚えるのに、開き方としては超安全策を取らないと、一般開放エリアを設定できなかったりするんですよ。やり過ぎだよ～、と思うんだけど、もしなんかあった時と考えると、…。

●森林所有者からみたコモンズ開放

司会(草苺):

…の社有林なんかは、もうちょっと開放してみたい空気と、何かあった時に責任取らされる要素とかあって、非常に葛藤があるんじゃないかな、と思いますね。結局、面倒なことは手を引こう、となる。

フロア(川合):

(自分の会社でも)ある程度、地域住民に森林を活用してもらった方が、…ですが、事故がもしあったら、というのが非常に…危険なことはやめようと…。

司会(草苺):

そこのところはなかなか難しく、裁判では負けるから、じゃあ、やめるかとなると、(他人の土地での)コモンズなんて成立しないんですよ。だから今から約15年前、苦東コモンズを立ち上げる前に、土地所有者の苦東会社の社長が、この方は道庁の方だったんですけど、「(フリーアク

セスでコモンズ利用して)もし何か事故でもあったら誰が責任をとるのか」という一点張りで、大勢の職員がいる前で、ガンガン叩かれて、わたしはすごく悪い立場になりながら、最終的には自己責任の世界にならざるを得ないのではないかと当時の銀行筋の代表取締役専務が助け舟を出し、まず「動いてもらうのが先ではないか」という裁きがあった。

(補足; 苫東の緑地は開放などと謳う前にすでに、実質的に地域のコモンズとしてにフリーアクセスだったのは、土地所有者も認めている。苫東コモンズはアクセスの勧誘はしないが、採草地のフットパスの刈り払いをしてサインを創ったり、林の保育と修景を進めて緑地の質を高めて、勇払原野の環境を共有しようということに主眼。)

そのときちょっと、苫東のためにも開放した方がいいんだという参考例の話をしたのですが、それは、その何年か前に北大苫小牧演習林でモトクロスのバイクで演習林の森に入り、入口のくさりに首をひっかけてライダーが亡くなるという、死亡事故があったのです。その時の林長は、「(バンディズムを乗り越え)森林をよくするためには開放した方がよい」という考え方で、メディア各社も林長のこの取り組みを後押ししていた。林長は当時の地元メディアをみんなおさえて「これはこういう目的で開放してきたのであり、…森を開放したわたしたちが一元的に責めを受ける筋合いのものではないことをご理解いただきたい」という趣旨の説明をした。とても支援者の多い人気のある林長だったから、この件は何もお咎めを受けることなどなしに終わったんです。こういう事故は自己責任と考えていくしかないね、というコンセンサスが、一応苫小牧ではできたように見えました。

そんな地域の背景も、苫東の社長から追及された時に申し上げましたが、社長を説得させる決定打にはならなかったようでした。

(補足: 苫東は経営破たんを機に、職員を半分に減らしてゴミの投げ捨てや不法伐採対応など管理に回せる職員が足りないとして、すべての林道入口を封鎖して実質的に原則入林禁止にした。苫東コモンズは、この緑地を塩漬けにする方針に疑義を唱える方向となり、市民の往来が逆にバンディズムを相互監視する効果がある、という北大演習林と同じ考えを述べた次第。以後、10数年の実績でコンセンサスを得たのではないかと)

● 森の開放と地域のコンセンサス

齋藤:

それも人の考え方が変わらないとだめかなあ、と思いますね。そんなの自己責任だろうって、普段から森に親しんでいる人なら思うんだけど、都会、町育ちの方々の感覚というのはどうしてもそうは見えない訳ですよ。そういう意味でも第一歩として、自然を開く、森を開くということ

が大事、少しずつ覚えていって森の中の過ごし方、自然の中の過ごし方と付き合い方のルール、マナーに近いようなことを、覚えていってもらうしかないし、今、草苳さんの話で思ったんですけども、地域のなかでのコンセンサスが出来上がる、これってすごく大事だと思います。地域の中のコンセンサスをまずは作りあげていくことが大事。一般的には、一足飛びに法律だとか条例だとかでルール作りになってしまう。だけど自分は逆なような気がしています。

フロア(小玉):

……今、地域の中のコンセンサスという言葉が出ていますが、……私は作る側としてよりもビジター側として……博物館時代などを含め感じたことを……森のコンセンサス、…富裕層とか貧困層とか……文化的に成熟しているか……。

苫小牧の状況をお話ししますと、……落ち葉がある、落葉が邪魔だと行政にクレームが来ると、……それを伐ってしまう……それに対して別の市民からなんであの大事な街路樹を伐ったのだと意見が出される……苫小牧だけでない……ある意味で行政がそれに対して …を示さないという未熟さ……木をもとに考えるという立場に立てば……例えば葉っぱビジネスとか……樹木あり葉っぱがある、それを拾って……というそれだけでも……投げかける……ハスカップの時もいい資源があるよ、……苫東を資源を獲得する場所としてみるか、それともみんなで守る場所にするかという……とかく前者になる。お金のためにメガソーラーを作って……そちらに流れる……うまくいってる地域というのはコンセンサス……どうしたらそこまでいくのかな、……

齋藤:

ぼくはそれを成熟と言っていいのかなあ、というような気もあったりします。というのは、前者といたのは都会的であり近代的な考え方ですね。そういう意味では発想自体は人間の歴史の中では一番新しい発想、ものの考え方です。でもその逆のみんなのものを守るというのはもっと古いわけです。古いもので、それを成熟と言ってしまってもいいのかな、ある程度成熟していたものが、ものすごく強力な近代的な考え方で、その本質はなにかというと自分の利益を最大化すること、ということです。

そこにあって自分の利益を最大化する手法をそもそも追い求めること自体が、近代的な考え方ですね。そうしたなるべく自分でガメてやるのがいいし、街路樹だって自分が落ち葉で迷惑をしていると、不利益を被っているわけですね。不利益(もとになるのは木)をなくすることが自分にとって利益を増し利益最大化になる、じゃ、行政職員に言っちゃえ、となるわけですね。行政職員にとっては自分にとって一番不利益の少ない方法は、言われたものを伐っちゃえと言うことですね。

■土地の独占と占有、そして共有する権利

齋藤：

そういう自然物がある意味、言い過ぎかもしれないけど自分のやりたいようにしたい、自由になるという考え方自体が時代の象徴というのか…。そんなことはないですよ。自分のものになりきれないですよ、自然は。草苺さんに紹介していただいた『森の経済学』でも書いたんですけども、森林というのは必ず所有者が必ずいますけれども、所有者がオレだけのものと言って囲おうとしても、絶対無理なんですよ。例えば森を眺める、いい緑だなあ、という資源性はその人が囲うことはできない。

ほかの人にも言える。自分のものとして所有権を 1:37:11 自分のもものだけでも自分だけのものではない、一番大事なのは「自分だけのものではない」というところで、恐らくそれは人間が何万年もかかって共通して持ち続けてきた感覚ではないのかなあ、と思います。その逆のような新しい考え方が覆いかぶさっている、だから占有できないというのかな、自然というのはもともとコモンズの性質は持っているんですけども、それを自分の言いなりにしちゃう、したいというような発想が生まれたのが近代、自分だけの都合で何かしたいという関わり方が蔓延した時代じゃないのかな、と思います。

司会(草苺)：

独占できるというのは、地べただけで、環境なんてものは隣の環境とか周りの環境とかすべての環境のなかで、自分の土地だけでなくできあがって…ものだし、…、地元自然と長く付き合い合っている人は、「結局、森はみんなのものだよ」言うんですよ。そこへどうやってたどり着けるか…

齋藤：

そうなんですよ。ナニナニのもの、という厚みというか広がりというか、確かに地べたはオレのもんだよ、と。でもその地がおとす木の実とかキノコとか、土地所有者にはコントロールができないですよ。コレ、投資したから、金かけたから木の実なったんだよ、キノコがはえてきたんだよという話でなかったりすることが多い…

司会(草苺)：

苫小牧で代表的な開発か自然保護かという構図も基本的に同じことで、例えば地べたを独占している大口の森林所有者がいて、その人は売り買いは自由じゃないかと思うわけだけど、1:39:36 その環境はみんなのものだということが大きくとらえた場合の見方…、ただ苫小牧の線引き?…があまりないというか、貴重な植物とか貴重な〇〇とか、偉い大学の先生に来てもらってその大事なものが無くなるから、絶滅危惧種だから駄目なんだ、というような論法で持っていくことにしているんですが、齋藤さんのように、環境はみんなのものだという〇〇が立てられないんですよ。

齋藤：

そうですね。その辺、難しいですけど、例えばイギリスなんかだと、まさにいまの近代社会にあって緑を守る手段として土地所有を押さえる、ナショナルトラストですね。手段としての方法はあるんだけど、彼らが目指したのは確かに「抑える」だけど、開いてなるべく多くの人に親んでもらう、実質的コモンズを創っていくような手法としてあったらおもしろいな、と思うのと、お亡くなりになったんですが、法社会学の平松紘（ひろし）さん、彼が主張していたのは、みんなが自然に権利を持っている、自然享受権だったり万人権というものです。もしそれが（北欧のように）法律的に認められていればそれを根拠に環境保全ができるんだ、ということを主張されていた。

たとえば、ある人、資本家が大きな土地を押さえました、ここに大きな工場を建てたいんだ、俺が買った土地だから、と言った時に、いやいやここはみんな憩いの場にしていましたよ、こっちにも権利がありますよ、ということになると、対抗できるんだ、というような論理ですよ。そういうような法理論というのがありうるだろうと、提唱されていたのが平松紘さんということです。みんなに親しむ権利があるんだ、という、だから俺がここを買ったのだからめっちゃくちゃなことをやってもいいんだというのは、なしよ、と。

■ 森づくりの目標

司会（草苅）：

今の日本でそれをいえば、あんた、何言ってんのということになりますよね。…なかなか難しい話になりましたが、もっと身近な話の戻って…。

フロア（川合）：

例えば森づくりという点で、…危険木処理とか下草刈りとかをして 林にして、その中で…理想の…その中で、その森の最終形という…今はナラ枯れもありますし、 森の更新はどういう風にしていこうとされているのか。それと癒しの森として皆さんが求める形が、…どれか一つを選ばなければいけないということではなくて、複数の…があると思うのですが、それはどのように考えておられるのでしょうか。

齋藤：

後者の方から答えると、40ヘクタールはそんなに大きくないのでいろんなことはできませんけれども、その中で基本的に考えているのは、初心者が来る、最初の質問にもあったように、リスクマネージメントができない方もいらっしゃる、ということを念頭に演習林内でやろうと思っています。だからなるべくすっきりした、藪がないような、特に道沿いですね。そういう感じてしているんですけ

れども、小さいながらも環境多様性は大事だということで、立木密度が低いところ、それなりに高いところというバラエティを出す中で管理はしています。なので、おっしゃるように環境のバラエティをもったタイプをそろえるということがソリューションだと。

それから将来どういう森に持っていくのかというのは、これほんとにわからないです。ナラ枯れも発生したり、われわれ想定していないことも起きるし、地元の人たちのプリファレンス、何を選好するのかというのも、時代によって変わってくる可能性がある。だから設定しない方が良く、というのが我々の考え方です。絶えず観察し続けて、アダプトしていく、最近だとアダプティブ・マネージメントという言葉もありますが、アダプティブ・ガバナンスというようなことにもなるんですが、需要も変わるし、森自体も変わるわけです。そのなかでどう折り合いをつけていくのかということをやっているしかない。

一応、大学の研究所としては、それだとあんまりだということで実験もしています。弱度間伐をしているとどうなるか、ということと、あと強度間伐、小面積皆伐のような方法ですね。これでどんなふうに更新が進むのかという実験項目をたててやっているところです。ただまだ10年しかたっていないので結果を出せる段階ではないんですけども。でもそれをやっておくことによって、地元住民に見せられる、こういう施業をするとこういう更新をするよ、というようなことですね。これは演習林のなかで、細々とやっている所です。見せられるのはあと10年後くらいでしょうか。

小面積皆伐したところは、今、高さ3mから4mの藪になっています。イヌシデやオニグルミなど、そういう樹種は更新します。期待したのはカラマツの更新なんです。林内を明るくしたら、カラマツはかなり光要求度が高いので、次世代のカラマツを養成するならかなり切り開かねばならないだろうという仮説があってやったんですが、確かにカラマツ出てきたんだけど、それ以外の草本類の成長がまず勝つわけですよ。で、残っているのは今一本程度です。草本類との競争にちゃんと打ち勝ったイヌシデとかオニグルミ、ウリハラカエデ、そんな藪になるのかなあ、というのが見えています。

フロア(川合):

カラマツの更新という話ですが、そこでは掻き起しなどのA層の表層度を問ったところでは、すごくよく更新し、今でも成長していて、……しています。土を持ったところでは、草本が繁茂……そのあたりも……

齋藤:

そうですね。ササの影響があつたりとか、ありますよね、北海道だと。

フロア(川合):

いろいろな施業をされているというなかで、更新された……

齋藤：

そうですね。小面積皆伐したのは、このあと全然何もやっていなくて、さて次はどんな手をいれるか、悩んでいる所です。実験区をさらに二つに割って、さらに施業をし続けたい、更新の放棄をしてしまい、もう一方で、抜いてレクリエーション的な森を創れるのかどうか。あのあたりを考えようかなと思っていますが、まだ方針が定まっていません。

フロア(川合)：

その点、コモンズでは……

司会(草苺)：

(シカ対策も考慮し)もうこのあたりしか方法がないのではないかとこのあたりまで方策は絞られてきてますね。(択伐では更新しないが)大面積皆伐すると問題なく更新はするんだけど、それではいわゆる広葉樹景観をなくすみたいなことがあり、小面積ならいずれもしのげるという点はあるんですけどもね。

齋藤：

実際作業の安全性から言ってもいいと思うんですよね。われわれが小面積皆伐をやったのはどういう目的があったのかというと、まず伐るメインのものを決めるんですよ、例えばこのカラマツですが90年生でそれなりに太かったんです。これを安全に倒すためには、こっちの方向だろうと決めるんですけども、伐る方向を決めてそれぞれ30度ふって、樹高プラス5mの扇形を先に伐ってしまふんですよ。すると安全に倒せる。素人の山仕事と言った時に、安全確保は大事なので、事故出たらめっちゃめっちゃ問題になる。だから素人ではだめなんだよ、となっちゃうから、そうでなくどうしたら安全な作業が出来るかというときに、小面積皆伐ですね、メインに切る木を考えた皆伐の在り方、掛かり木にしたりとか、除伐間伐で怖いのはその事故ですよ。それだったら小面積皆伐しちゃって、……。

司会(草苺)：

来年からはコモンズもそれでいこう、と。(笑い) 倒したい方向で先行して小面積皆伐をするのは大なり小なりやってはいますが、もう意図的に……

……ここでいくつかやり取り発言あり、不明……

齋藤：

安全だけでなく効率も良かったりしますね。樹高25mと見積もられたから半径30mの多い方を皆伐しました。60度の扇形の範囲をきれいに、細い木からだんだんに伐って行って、完全にクリアにしておいて、扇形のパッチが林内にできたということです。

フロア:

シカ食害試験地の小面積皆伐は約1000㎡で、、、結構広い、、、扇形は……

■身近な民有林の救済方法は、「薪利用」ではないか

司会(草苅):

ちょっと話題を変えてもいいですか。さいきん、個人的にというか、みなさん、きっと同じ思いなんじゃないかなあと思うんですけれども、身近だが放置されて荒れた民有林を、上手に改善していくための方法論というのは、行きつくところは「薪としての利用」ではないかと思うんですよ。それが地域の循環にもなるし、地球環境などという口幅ったいことを言わなくてもいいし、それに伐採技術の腕を磨きたい人も潜在的にすごくいて、コモンズがいい例ですが、各地で仕組み作りが待たれていると思うんです。薪というのは今、マニアックな人だけの贅沢にとらえられがちだけど、いや、ネットなどを見ていると、要らなくなった木を集めながらコツコツと薪にして…身近な林の手入れの解決策として、「薪づくり」はますますクローズアップされる仕組みになっていくような気がしているんです。……

齋藤:

ぼくもその辺興味があって、指導した学生もその辺を調査したんですが、いろんなことがわかりました。移住者で住みこんで、それなりに年数を経た人というのは、地域の中で人と人とのつながり出てくる。そういう人たちが、伐らせてもらえる場所、薪を取らせてもらえる場所で自分たちがやれるようになる。1:55:20 けれども、移住者の中でも移住歴が短い人はそういうつながりがない。そういう週末しかきません、とかいう方は金で解決することがわかった。

それと地元住民が一番人と人との関係性は濃いんだけど、逆に濃いからあげるよ、という声がたくさんかかって、山には目がいかない。山に行かなくなると手に入っちゃうから、黙っていても材が来る。だから山に行かなくてもいいや、邪魔になった木をもらってくれよ、という話がかかるから、ということですね。そんなことが見えてきました。

その中間層というのが狙いどころだと思うんですが、どう、山にくっつけるか。そこが難しいところ。最初、われわれ研究所側で考えたのは、薪ストーブユーザーの組織会みたいなもののグループ化なんです。どうやら別荘住民はなるべく近所づきあいしたくない、みたいな方々もいて、実際に過去にグループを作ったりしたんだけど、あとで仲たがいがいたり、とかね。長続きしなくて、なかなか難しいところだなと思っています。

あと、アンケートでも分かったように、自分で何か仕事をしたいと思っている人がいるんですよ

ね。その段階というのが、あるんじゃないかなと思うんです。自分で本当に山まで行きたい人もいるし、なかにはそんなこと言っても道具だってないし運搬する車だってうちはカローラだよ、というような話もあるので、そういう人たちにとっては自宅まで届けてあげるサービスがあってもいい。薪って、使うまで多段階なので、どこの段階でお届けするか、サービスを提供するか、という地域別の勤どころかな、と思います。もちろん乾燥した薪を持って来いよ、という人もいますが、そうじゃなくて半製品というのかな、まだでき切っていないものをサービスとして出すというのも、考え方だと思っています。だから薪原木販売会にあんなに人が来たと言うのは、その状態でも欲しいという人がいるということですね。オレは薪を割りたいんだよと言う人もいる。

司会(草苅)：

演習林だけで地域の人の薪を賄うというわけではないことと、圧倒的に地域は針葉樹が多いということ、そしてニーズは広葉樹の方があって、ということはどこか遠いところから薪を買っているという可能性がありますね。

齋藤：

ショックだったのが、ナラ枯れが発生してから地元の林業労働力がナラ枯れ処理にとられたわけですね。そうすると、これまでの地元の林業従事者が薪を作って薪ストーブ屋さんに卸していた、その薪ストーブ屋さんが自分の売ったユーザーさんにその薪を届けていたんですけれども、薪づくりの仕事が入ってこなくなってどうしたかという、エストニアから輸入したというんです。でもあれは変えたいですね。村内で燃やすのならわれわれの薪を燃やしてくださいという仕組みを創りたいですね。村行政の方としてはその方が歓迎ですね。

フロア(小山)：

今の話とちょっと違うんですが、ナラ枯れというのは薪を使う段階で、昆虫なんですか、広がるという心配はないんですか？

齋藤：

昆虫です。少なくとも僕らが試験した結果、薪を割ることによって断面積が広がりますよね、表面に虫の穴がかなり出るわけです。幼虫が動いていてぽとぽと落ちるんです。落ちると戻れなくなって死にます。今年やった試験だと、駆除率100%という数字が出ました。

フロア(小山)：

伐って使った方がいいですね。

齋藤：

はい、いいんです。そしてなるべく早く割る。丸太のまま放置しておくと、まだぽとぽと落ちれない

やつがいるから、結局成虫になって出ていく。それも試験で確かめられた。割るということが大事だということがわかりました。

フロア(小山):

北海道ではまだ話を聞かないから。

齋藤:

でもじきに来ますね。だからもう渡島半島までははいつているから。渡ってきていつ来てもおかしくないです。

ところで北海道では薪を使う人は増えています?そうでもない?

フロア:

増えているそうです。……キャンプブームもあって……

齋藤:

それで本州では薪泥棒も発生しています。無人販売していたところで、いままでそんな被害は全然なかったんですけど、キャンプブームになってから、勝手に持っていきやつが出てきて薪泥棒が発生する事態になっています。さもない。ただキャンプブームはブームに過ぎないので、暮らしの中で使う人がどれだけ増えてくれるかということでしょう。

フロア(川合):

薪がそれ程需要があるということであれば、各ユーザーがというよりも、村が主導して……伐採の管理、広い土場、住民たちの役割分担のような、……働きのポイントに応じて分配するというようなシステムは……。

齋藤:

ありうるでしょうねえ。山仕事したい人を募って、そういうのはあり得ますね。ただ、今、山中湖村がメインで考えているのは、絶対買うという別荘ユーザー、週末しか来ないでしかもお金持ちで、と。

司会(草苺):

週末しか来ないんであれば、使う量なんて知れています。セカンドハウスなので。

齋藤:

そういうユーザーに金で売るといふ。村の事業ではそこをターゲットにしています。

司会(草苳):

苫東コモズの育林コンペに参加している厚真森林(森)結びの会の西埜さん、薪ユーザーや生産者と色々な人たちをみて、薪の方向性みたいなことで感じることはないですか?、薪需要と森づくり…。西埜さんしか気づいていないトレンドはないか、と。林業としての木材生産とほだ木だとか薪だとか、薪の割合というのは多くないんですか?

フロア(西埜):

薪はだいたい50㎡程度で、試しながら、それぞれ川合さんの社有林で自分で伐ったやつを購入して薪にするという、…自分で作業した分を自分で加工して販売できたらいいなあ、と薪販売をやっているんですけど、宣伝はしていないので徐々に口コミで販売したりとか、ほだ木も地元の商店などにだして販売したりとか、…。

。

司会(草苳):

西埜さんの所では、薪ビジネスとしてメインではないということですね。……

フロア(西埜):

薪はすぐは腐らないとか、ちょっと仕事が切れたときに自分で作業して、保険じゃないけど、そんな感じでやっています。

齋藤:

ほだ木だと、このくらいの径がよくて、なるべく直材でとれるものを選んでいくけれども、人に使ってもらうための薪というのは、形状を選んだりするんですか?自宅用だと最後は何でもかんでも使いますよね。どうせ燃やすんだからすべて使い切るみたいに。営業として薪を考えたときに、そういう無駄が出てくるのかとか。

フロア(西埜):

そんなに無駄は出ないです。イタヤの堅木とそれ以外の、値段は変えて、ナラは㎡あたり27000円で販売して、やわ木は〇〇にして、……1㎡2000円とか、薪は腐ったものとか自分の管理が悪くて…なものとか、……そういうのはもっと近い人で質は悪いけど安く取引するみたいな…自分ちでは薪ストーブと薪ボイラーを使っているんで、灯油は一切使わない感じで…作業がおわったら、もうなんでもいいから持って帰って自家用にする…

齋藤:

そういう意味ではグレーディングがあるわけですね。でも最終的にはすべて使える、というのが薪の良さなんでしょうね。やはり人からお金をもらおうとすると、いいものを、という。薪はグレーディングが広いという感じがしますね。そしてその広さが森づくりにとっては魅力なのかもしれない

ですね。

フロア(西塾)：

さきほど話があった技能と技術という点では、自問自答ではないけど、結構そこにつながるころがあって、ローテクな・・・やってみると自分自身も楽しいとか、一緒に作業に来てくれる人も・・・子供たちと接する機会があるとか、・・・そういう考え方もあるなあ、と・・・

齋藤：

現代社会って、技術を高めることが何でもかんでもいいことだってハイテク化する方がいい、って思われているんですが、技術が高まるとだんだん人間の能力を失っているんですよね、テクニックも。だから技術が進歩すると、道具と技術に頼るから人間の能力は退化する。人間がこれまで生身で培ってきた技っていうのは、技術の進歩とともに退化する。ハイテクでああいいなあという一方でまた能力ひとつ失ったんだなあと見た方が実はよくて、もしかしたら楽しみも失っているかもしれませんよね。

司会(草苺)：

〇〇は技能と技術の間あたりで、ちょうどいいのかもねえ(笑い)

齋藤：

確かにちょうどいい。ローテクばかり使っていると体を壊したりしますけどね。いいところのバランスというのは大事ですよ。森づくりによって技術が増すかどうかは地域ごとによって違うような気がするんです。どの技術がマッチするか。

司会(草苺)：

ひとつ言えるのは、一緒に森づくりを手掛けた人たちで、転勤などでここを離れた人以外では、やめた人はいないんですよ。そして最後は薪ユーザーになる。

齋藤：

それはすごい。それはきっと薪仕事をする、っていうことになにかあるんでしょうね。

司会(草苺)：

もっと言えば、今、薪づくりの仕事をしている人は、自分で森づくりに参加して自分の暖房を自賄いする生活にたどり着いているので、快感みたいなものがあるんじゃないですか？

齋藤：

充実感。僕もそうですが、ある意味、思い入れありますよね。特に節のあるようなもの、あ、あれはあの時割ったやつだとかね、暴れ木のようなものとか。

■癒しという言葉と、森林への現代の隠れた要請

司会(草苺):

あとやっぱり、すごく気になることは初歩的な話で悪いんですけど、癒し、という言葉、なんかなんかザワツとするんですよ、森づくり、っていうのもどこか恥ずかしいような。なにかもっと適切な言葉で言い換える方法はないのかっていう思いがずっとあります。癒しのニーズは奥深くあるのに。

齋藤:

そうそう、そうなんですよね。特に癒し系、なんていわれていたから。2000年代、そっちのイメージが強くて。

フロア:

ものすごく横道にそれますが、……個人的なことですが仕事が変わってパニック障害となって、森から……五感で森を味わうという体験をしたんです。すごい久しぶりで、山菜やキノコを味わったりハスカップを取ったりする生活以外に、……森っていきものだったんだなあ、とすごく思い出せた、そんな経験があった。……今、デイサービスなどの禁止されている所が多いので、……癒しという言葉、すごく難しいと思うんですが、……自然観察という側面もあるので、……雑駁な感想ですが。……

齋藤:

ありがとうございます。実際、森に関わられた人でも、それ有るんだ、という心強いというか、思うところあります。最後の記事にも書かせていただいたんですけども、実は学生の教育のためにも、森の癒しとポジティブメンタルヘルス、医学用語でこの用語があるんですね。とにかく、ポジティブな感情を尊重する、癒しというのはたぶん、ポジティブな感情と理解していいんじゃないかなと思うんです。それを引き出す場として、森というのはある意味優れているのかも、と思ってるんですね。

〇〇さんはもともと森林の専門というのか、森林と深く関わられた人に対しても、そういう経験があると聞いて参考になりました。大学の1,2年生の教育についてちょっと書いているんですが、というのは東大生もかなりメンタル、やられているんですよ。特にコロナで増えててここ3年ぐらい、東大の附属病院の先生方と付き合いができて、その附属病院の人たちも、キャンパスの緑地、あるいは農作業体験、というのを、うつ病からの快復プログラムに活用されているんですよ。

そういう観点から、折角大学が森を持っているんだから、東大の構成員である学生たちの、メン

タルヘルスを高めるために、活用できないかというのを一緒に話し合っています。一回、メンタルが不調になると、本当に壊れちゃうと、完全修復って難しいんですって。だから大事なのは手前でいかに止めるかで、東大生の1割、2割がメンタルヘルスの病を抱えているみたいな状況になっていて、これからの現代社会を歩いていく若者の教養として自分のメンタルヘルスの変化に気づく、そうなったらどうやって主体的にあげられるのか、それがポジティブメンタルヘルスなんです。

そこで場、環境を代えることが大事で、特に自然と触れ合うことによって違う感覚を呼び覚ましたり、それをきっかけに自分を相対化してとらえたり、とにかく、感覚が都会の中で営まれていたのが自然の中で感じられる。そういうのを体験を通じて、わたしはこれがあるかもしれない、こういうのを見つけ出してもらうための授業をやったんです。それをやると見事に、初めて森に来た人も、俺はこれだということを見つけてくれるようなことが実体験としてあり、そういう場として活用していけるのかな、と。

司会(草苺):

いま、パニック障害の話が出ましたので、思い出しました。わたしも40代の前半にパニック障害、あるいは心臓神経症とか、色々な病名付けられましたが、一言で言えばパニック障害なんです。ものすごく不調になって地下鉄などに入ると冷や汗が出て大変だったんですけども、でもね、わたしはその当時、苦東の緑地管理という、森の中にはいつでかけてもいいポジションだったから、現場にはいくらでも調べる対象があるして、非常によく雑木林の中を歩いて、調査のようなことをしていたんですよね。だから、おっしやるような初期のうつ病になるような段階で森林に関わっていると、メンタルヘルスには絶対プラスだな、という自信のようなものがある。森づくりの必要性というの、遠浅なら遠浅のような、あの山林を手入れして使わない手はないということをもって感じるんですよね。それが深いところで、わたしの、気持ちのいい美しい森づくりの動機になっているんです。やっぱり、人間のこころっていうのは、結構壊れやすいんですよ。今、社会を見ても結構それは思いますね。

フロア:

……実家が山中湖村で……出身は神奈川県なんですけど10年前に移住してそこで……生まれ育って……山中湖村の景色……道路沿いの景色……お正月など買えると……実家の家の前もナラ枯れしていたり……見える林が……すごい変わって来た……

齋藤:

そうですね。そういう意味では、ナラ枯れはチャンスだと思っていて、ナラ枯れで真っ先に処理しなければいけないのは、道路沿いです。通行中に車に倒れてきたり、というのは避けなければならないし、論理づけしやすいのでそこから踏み込んで、道路沿いはきれいにしましょうよ、ぐらい

のレベルまで地域としてなればいいなあ、と思っています。おっしゃる通りです。気づいている人、やっぱりいますよねえ。それをこじ開ける機会として、ナラ枯れは本当にチャンスかな、と思っています。

フロア：

…別に太い木があるわけではなく、細い木がワシャワシャとあるんですよね。それはどうしたらよくなるんでしょうね。

齋藤：

ほったらかしですよ、基本的には。5, 60年前なほとんど明るい林だったんだらうと思います。そこからワサーっと生えてきた。カラマツの植林もしたけれど、ほとんど手入れもしないうちに、ワサーとなってきたのがメインなので、基本は手入れ不足です。管理不足です、ハイ。せいぜい、6, 70年生というのが多いです。

司会(草苅)：

丁度4時半になりました。あとお一人ぐらい。あとで後悔しないように…。
はい、いいですか。

では、齋藤さん、今日はどうもありがとうございました。苦東コモンズとして、癒しをテーマにしたフォーラムを3年前から企画してきましたが、コロナで2回ほど流れて、今回は、森づくりも含めて癒しまで広範な内容を齋藤さんにカバーしていただきました。

これらはいずれも永遠のテーマのような気がしていますので、齋藤さんの本も読みながら勉強していきたいと思います。また機会がありましたら是非おいでください。本日はありがとうございました。

(会場、拍手)